

## 萩原正樹

韻 叶 句 叶 韻 換 仄 仄 叶 平 叶 句 平 叶

南唐 李後主

第三句「寂寞」は、『鷗夢新誌』(第三八集)では「寐寞」となっているが、これは明らかに誤植であり、

「正誤」(同第六五集)によつて訂正した。『詞律』(卷二)所收。別名、平仄式、作例等すべて『詞律』と同じ。作例の後の「後起三句。須一意連下。如九字句」という註は、『詞律』註に「寂寞至清秋、別是至心頭、皆是九字句、語氣亦可于第四字略斷」とあるのに據つたのであらう。『詞律』は後闕初二句について「斷亂二字、是換仄韻、如昭蘊之幕閣、稼軒之轉斷、希眞之事淚、友古之路處等、俱同、各譜俱失註、是使學者落去二韻、其誤甚矣」と論じ、異體に關しては、「惟友古後起兩句不叶韻、夢窗一首云、一顆顆、一星星、是秋情、星字叶平韻、竟似訴衷情換頭矣、因句字同、不另錄」と述べている。すなわち萬樹は、李後主「無言獨上西樓」詞を代表とする後闕初二句を仄聲で押韻する詞體のほか、友古(蔡伸)の押韻しない詞體と夢窗(吳文

一八、長相思 三十六字 一名雙紅豆 山漸青 憶多嬌 吳山青 雙調 凡四體今錄一（同第三八集）

韻  
韻疊

叶

叶

叶

韻疊

叶

叶

唐白居易

兩起二句。須對比聯照如此。且二句用同一韻字爲格。

『詞律』(卷二)は、この白居易「汴水流」詞のほか、劉光祖三十六字體(「玉樽涼」詞)、楊无咎一百字體(「急雨回風」詞)、柳永一百三字體(「畫鼓喧街」詞)の計四體を収める。森川竹礫が詞牌下に「凡四體今錄

一」と言うのは、『詞律』に従っているであろうが、ただ、竹磬が別名として挙げている「吳山青」の名は、『詞律』に見えていない。<sup>②</sup>『欽定詞譜』(卷二)は別名に關して「唐教坊曲名、林逋詞、有吳山青句、名吳山青、張輯詞、有江南山漸青句、名山漸青、王行詞、名青山相送迎、樂府雅詞、名長相思令、又名相思令」と註し、『吳山青』『山漸青』『青山相送迎』『長相思令』『相思令』の五種を別名としているが、竹磬はこれに據ったのであろうか。しかし、だとすれば、『青山相送迎』『長相思令』『相思令』についても言及していたと思われる、竹磬が『欽定詞譜』に據ったか否か遽には斷じがたく、しばらく疑を存しておきたい。平仄式については、『詞律』と同一である。『欽定詞譜』も同じ白居易の「汴水流」詞を引いているが、前闕第一句第一字第二字、第二句第二字、及び後闕第二句第一字を「○」としているのみで、他の文字には半白半黒圈を施していない。また、「兩起二句。須對比聯照如此。且二句用同一韻字爲格」という註は、『詞律』『欽定詞譜』等に類似の記載が見えず、竹磬自身の見解として加えたものであろう。實は「長相思」は、前後闕初二句を必ず疊韻とするわけではないのであるが、竹磬は初學のためにこのような註を附したと考えられる。なお『欽定詞譜』は、三十六字體の作例を全部で五體掲げているが、<sup>③</sup>これは冗漫にすぎるくらいがある。すなわち、『詞律』も挙げている白居易「汴水流」詞、劉光祖「玉樽涼」詞のほか、白居易「深畫眉」詞(後闕第一句を押韻しない體)、晏幾道「長相思」詞(前後闕初二句に「長相思」句を疊用する體)、歐陽脩「蘋滿溪」詞(前後闕初二句を別々の文字で押韻する體)を録しているのであるが、前闕と後闕とで韻が異なる劉光祖「玉樽涼」詞以外は、すべて白居易「汴水流」詞と小異の同體と見なしてよいであろう。『詞律』が白居易詞の後に「後首句、可不叶韻」と註し、また、『詞律大成』(卷二)が「前後同、兩起處不必用疊韻、如歐陽脩詞、前用蘋滿溪。柳繞隄。後用煙霏霏。雨淒淒。是也、(中略)、後段起句、或可不叶韻、如白別一首、後起三句、用巫山高。巫山低。暮雨蕭蕭郎不歸。是也」と註記しているのを、簡要とすべきである。

## 司

孤村橋斷人迷路。  
舟橫渡。  
旋買村醪淺淺斟。  
更微吟。

● ○ ○ 韻 ● ○ ○ 叶 ● ○ ○ 叶 ● ○ ○ 叶

韻換  
仄  
仄叶  
平叶

宋無名氏

『詞律』(卷二)は、「風光好」の作例として、五代・陶穀十六字體(「好因緣」詞)一體を挙げ、「此調音甚妥叶、而宋人作者甚少、天機餘錦所載、柳陰陰一闋、正與此同」と述べている。この陶穀「好因緣」詞は、「苕溪漁隱叢話」(前集卷二四 五季雜記 人民文學出版社 一九六二)に「小詞春光好、待得鸞膠續斷絃、是何年之句、江南野錄謂是曹翰使江南贈娼妓詞、本事曲謂是陶穀使錢塘贈驛女詞、冷齋夜話謂是陶穀使江南贈韓熙載歌姬詞、是一詞而有三說也、其他類此者甚衆、殆不可遍舉」と記されているごとく、南宋當時より作者や製作事情について諸説があり、竹篸はそれを嫌ったためか、萬樹が註中でも觸れている「柳陰陰」詞を載録している。『詞律』が「而宋人作者甚少」と言うように、元以前の「風光好」の作例は、「好因緣」詞と「柳陰陰」詞の二體しか現存しておらず、竹篸は残る一體である「柳陰陰」詞を採ったのであろう。作例が異なるため、『詞律』が「可平」としている三箇所を、「詞法小論」はすべて「○」に改めている。なお、萬樹は「天機餘錦所載、柳陰陰一闋」と言うのみで、「柳陰陰」詞の全文を挙げていないが、この『天機餘錦』は、明の萬曆頃まで傳存していた詞選集<sup>⑤</sup>で、明・陳耀文編『花草粹編』にそのうち十六首が轉載されている。「柳陰陰」詞は『花草粹編』(卷一 南京國學圖書館陶風樓影印本)に、作者名を『天機餘錦』として錄され、また『花草粹編』に據った清・朱彝尊編『詞綜』(卷二四 中華書局影康熙三〇年裘杼樓刊本 一九七五)も「見天機餘錦」と明記して「宋無名氏」の項に「柳陰陰」詞全文を収めている。竹篸が作者を「宋・無名氏」と記していることからすると、恐らく『詞綜』を参照して「柳陰陰」詞を掲載したものと思われる。一方『欽

二〇、昭君怨 四十字 一名宴西園 一痕沙 洛妃怨 雙調 (同第三八集)

○ ○ 叶二  
灰

韻

叶

韻換平

平叶

韻換仄

灰叶二

平再韻換

宋 万俟雅言

原文は、作者名を「万俟雅言」に作るが、「正誤」により「万俟雅言」に改めた。竹磴が最初に「万俟雅言」

と誤っているのは、『詞律』康熙刊本に従つたためであろう。保滋堂康熙二六年序刊本は、作者名を「万俟雅言」としている。なお後の『校刊詞律』では、「万俟雅言」と訂正している。句式、引用詞は『詞律』（卷三）と同じ。ただ『詞律』は、別名について「又名一痕沙、宴西園」とし、「洛妃怨」の名を挙げていない。『欽定詞譜』（卷三「昭君怨」）は、詞牌下に「朱敦儒詞咏洛妃、名洛妃怨、侯寘詞、名宴西園」と註して、万俟詠四十字體（「春到南樓雪盡」詞）、蔡伸三十九字體（「一曲雲和鬆響」詞）、周紫芝四十字體（「滿院融融花氣」詞）の三體を掲げている。『欽定詞譜』編纂の基礎となつたとされる『歷代詩餘』（卷三）では、詞牌下に「一

二一 a、訴衷情 四十一字 一名桃花水 雙調 凡七體今錄二（同第三八集）

[illegible]

五代 毛文錫

桃花流水漾縱橫。春晝彩霞明。劉郎去。阮郎行。惆悵恨難平。  
愁坐對雲屏。算歸程。何時攜手洞邊迎。訴衷情。

『詞律』(卷二)は「訴衷情」の作例として、溫庭筠三十三字體(「鶯語」詞)、韋莊三十三字體(「碧沼紅芳烟雨靜」詞)、顧夔三十七字體(「永夜拋人何處去」詞)、魏承班四十一字體(「春情滿眼臉紅消」詞)、王益四十四字體(「燒殘絳蠟淚成痕」詞)、趙長卿四十五字體(「花前月下會鴛鴦」詞)、歐陽脩四十五字體(「清晨簾幕卷輕霜」詞)の計七體を載録している。四十一字體には、魏承班「春情滿眼臉紅消」詞が挙げられている。



## 詞

宋 康與之

阿房廢址漢荒圯。狐兔又羣游。豪華盡成春夢。留下古今愁。君莫上。古原頭。淚難收。夕陽西下。塞雁南來。渭水東流。

前條に述べたように、『詞律』（卷二）は四十四字體の作例には王益「燒殘絳蠟淚成痕」詞を挙げているのであるが、竹礫はこれを康與之「阿房廢址漢荒圯」詞に改め、同時に平仄式においても、前闕第一句第一字を『詞律』の「可仄」から「●」に、前闕第三句第一字第四字を「可平」から「○」に改めている。「詞法小論」では「或加令字」と記しているが、この記載は『詞律』に見えない。「訴衷情」四十四字體を「訴衷情令」と題するのは、宋・黃昇編『中興以來絕妙詞選』（卷一）『景刊宋金元明本詞』所收本に收める康與之の二詞（「鬱孤臺上立多時」詞及び「阿房廢址漢荒圯」詞）のみであり、これに據って竹礫は、作例を康與之の詞に變え、「或加令字」と註記したのであろう。また前條で引いたごとく、『欽定詞譜』（卷五）は「訴衷情令」を一項に獨立させており、この影響があつたとも考えられる<sup>⑨</sup>。ただ『欽定詞譜』が、「訴衷情令」を詞牌名としながら、作例に晏殊四十四字體（「青梅煮酒鬪時新」詞）、歐陽脩四十五字體（「清晨簾幙卷輕霜」詞）、張元幹四十五字體（「八年不見荔枝紅」詞）の三體を舉げて、その註中にも康與之詞に全く言及しないのは、不備と言わなければならない。ところで『欽定詞譜』は、「訴衷情令」の別名として「漁父家風」と「一絲風」の名を挙げている。後者の「一絲風」は、先に記したとおり、『詞律』が溫庭筠三十三字體の別名としているものであった。それを『欽定詞譜』は、四十四字體の別名と見なしているのであるが、『欽定詞譜』が詞牌下註に「張輯詞、有一釣絲風句、名一絲風」と言うように、宋・張輯が「訴衷情」四十四字體の詞調で詠んだ「臥虹千尺界湖光」詞（『全宋詞』第四冊 二五五四頁）の後闕末句「一釣絲風 吹盡荷香」に因んで附けられた別名であり、<sup>⑩</sup>萬樹が三十三字體の別名とするのは誤りであろう。『詞律大成』（卷二）は、溫庭筠三十三字體



（「鶯語」詞）の下に何も註記せず、四十四字體の作例として引く柳永「一聲畫角日西曠」詞の詞牌下に「或加令字、又名一絲風」と述べて、『詞律』の誤りを正している。

### 二二、春光好 四十一字 雙調 凡六體今錄一（同第三九集）

○●●句●○○韻●○○叶●○○○○●○○叶●○○叶  
○○叶

詞

五代 和凝

蘋葉軟。杏花明。畫船輕。雙浴鴛鴦出綠汀。棹歌聲。  
春水無風無浪。春天半雨半晴。紅粉相隨南浦晚。幾含情。

『詞律』（卷二）には、和凝四十字體（「紗櫳暝」詞）、歐陽炯四十一字體（「蘋葉軟」詞）、張元幹四十一字體（「疏雨洗」詞）、曾覲四十二字體（「心下事」詞）、張元幹四十二字體（「花恨雨」詞）、葛立方四十八字體（「禁烟却釀春愁」詞）の六體が載録されているが、このうち歐陽炯の作としている「蘋葉軟」詞を、竹溪は和凝の作として掲げているのである。「蘋葉軟」詞の作者を歐陽炯とするのは『尊前集』（『彊村叢書』所收本）だけで、宋紹興本をはじめ『花間集』の諸本はいずれも和凝の作品（『花間集』卷六）としており、「詞法小論」の措置のごとく、和凝の作とするのが正しいであろう。平仄式は『詞律』とほぼ同じであるが、後闕第一句第一字「春」を竹溪は「○」としている。『欽定詞譜』（卷三）は、和凝四十字體（「紗窗暖」詞）、和凝四十一字體（「蘋葉軟」詞）、歐陽炯四十一字體（「天初暖」詞）、張元幹四十一字體（「疏雨洗」詞）、晏幾道四十二字體（「花陰月」詞）、梅苑無名氏四十二字體（「氷肌玉骨精神」詞）、蔡伸四十三字體（「鸞屏掩」詞）、梅苑無名氏四十八字體（「看看臘盡春回」詞）のすべて八體を録し、「蘋葉軟」詞を和凝の作とする<sup>⑩</sup>。ただ平

仄式は、例えば前関第一句を「○●○」とするごとく、『詞律』『詞法小論』とは若干異なっている。『詞律大成』(卷三)は、計五體<sup>⑧</sup>を引き、四十一字體には歐陽炯の「垂繡幕」詞を擧げている。

二三、點絳脣 四十一字 又名南浦月 沙頭雨 點櫻桃 雙調 (同第三九集)

●○○○句●○○●○○○韻●○○●叶○○○○●叶  
○○●叶

詞

宋 周邦彥

遼鶴歸來。故鄉多少傷心地。短書不寄。魚浪空千里。  
憑仗桃根。說與相思意。愁無際。舊時衣袂。猶有東風淚。

『詞律』(卷三)は、趙長卿四十一字體(「雪霽山橫」詞)を擧げる。ここでも竹礫は、作例を周邦彥詞に改めているのである。「一〇—b南鄉子」條でも述べたが、これは竹礫の研究の迹を示していると考えられよう。作例が違うことにより、前関第二句第三字、後関第五句第一字を『詞律』の「可平」から「○」に、後関第二句第一字を「可仄」から「●」に変更している。『詞法小論』は、「南浦月」「沙頭雨」「點櫻桃」という三種の別名を掲げているが、『詞律』は別名について何も觸れていない。別名に關して、『歷代詩餘』(卷五)は「取江淹詩明珠點絳脣之句、一名點櫻桃、一名沙頭雨、一名南浦月、一名一痕沙、雙調四十一字」と記し、『欽定詞譜』(卷四)は「宋王禹偁詞、名點櫻桃、王十朋詞、名十八香、張輯詞、有邀月過南浦句、名南浦月、又有遙隔沙頭雨句、名沙頭雨、韓淪詞、有更約尋瑤草句、名尋瑤草」と述べており、いずれも竹礫が引いている三種よりも一種ないし二種多い。三種のみを擧げるのは、管見の及ぶ範圍では、近人陳栩・陳小蝶『攷正白香詞譜』(卷一 點絳脣攷正 上海古籍書店影振始堂一九一八年刊本 一九八一)の「右詞四十一字、亦名

南浦月、沙頭雨、點櫻桃」という記述と、聞汝賢『詞牌彙釋』に引く『白香詞譜題考』の「按此名甚艷、蓋謂女郎口脂也、故又名點櫻桃、至更名南浦月、沙頭雨、則取作家詞中語耳」という記事の二例だけであった。竹溪が何に據って三種の別名を擧げているのか不明であるが、後年の『詞律大成』（卷三）では、「南浦月」「沙頭雨」「點櫻桃」に加えて「烏衣怨」という別名も擧げている。『欽定詞譜』は、馮延巳四十一字體（「蔭綠圍紅」詞）、蘇軾四十一字體（「不用悲秋」詞）及び韓琦四十三字體（「病起懽懽」詞）の三體を載せる。『詞律』の趙長卿詞、「詞法小論」の周邦彥詞と同體なのは、馮延巳「蔭綠圍紅」詞であるが、平仄式は少し異なっている。ところで、韓琦四十三字體について『欽定詞譜』は、「此詞見花草粹編、前後段第二句、俱多一字、詞律疏於考據、反駁草堂之誤、非也」と述べ、『詞律』を非難しているのであるが、これは、萬樹が趙長卿詞の後に「沈氏別集、選韓魏公病起懽懽一首、次句云、對庭前花樹添憔悴、此誤多對字、沈不能辯明、乃註題下云、前段多一字、是使後人誤認、有此四十二字體矣、謬哉」と註しているのを指したものである<sup>⑧</sup>。すなわち韓琦「病起懽懽」詞は、『花草粹編』では前後段第二句を八字句と六字句に作り、明・沈際飛編『草堂別集』は前関第二句を八字句としているが、これを『欽定詞譜』が四十三字體の又體と認めるのに對して、『詞律』は沈際飛の誤りと見て又體に採っていないのである。だが『全宋詞』（第一冊 一六九頁）を檢してみると、韓琦「點絳脣」詞は前関第二句を七字句、後関第二句を五字句に作る四十一字體の詞となっている。『全宋詞』は、宋・吳處厚の『青箱雜記』（卷八）より引いているのであるが、李裕民點校『青箱雜記』（中華書局 一九八五）「校記」に據れば、「商務本說郛」が前関第二句を「宴對堂前花謝添憔悴」という九字句にしているのみで、他の諸本はいずれも七字句に作っており、やはり明人の言よりも宋人の著述に従うべきであろう。『詞律』に對する『欽定詞譜』の批判は、當を失したものと云わなければならない。『詞律大成』では、「此體、萬氏錄趙長卿雪霽山橫詞、今改之」と記して、四十一字體の作例に馮延巳「蔭綠圍紅」詞を録し、また殘念

ながら、韓琦詞を四十三字體として補體に掲げている。

二四、中興樂 四十二字 又名溼羅衣 雙調 凡三體今錄一（同第三九集）

●○○叶  
○○●●○○韻○○●○○叶●○○句●○○叶  
●○○●●○○叶○○●○○叶○○●○○句●○○句

詞

五代 牛希濟

池塘煖碧浸晴暉。濛濛柳絮輕飛。紅蕖凋來。醉夢還稀。春雲空有雁歸。珠簾垂。東風寂寞。恨郎拋擲。泪溼羅衣。

後闕第四句の平仄式を、『鷗夢新誌』（第三九集）では「●●○○」としているが、「正誤」により、「○○●●」に改めた。『詞律』（卷三）は、毛文錫四十一字體（「豆蔻花繁烟艷深」詞）、牛希濟四十二字體（「池塘煖碧浸晴暉」詞）、李珣八十四字體（「後庭寂寂日初長」詞）の三體を擧げる。作例は同じであるが、平仄について『詞律』は、後闕第二句第一字「珠」字を「可仄」とするだけで、他に可平可仄の註記を加えていない。また別名の「溼羅衣」に關して萬樹は、「按此調、因此詞尾三字、好異者遂名爲溼羅衣、已爲可厭、選聲即以溼羅衣立名、至圖譜、則又訛而爲羅衣溼、且并前毛司徒詞、亦謂之羅衣溼矣、豈不大悞、此類甚多、作者但須詞佳、何必務立異名以爲新乎」と述べ、清・吳綺程洪編『選聲集』や『填詞圖譜』を激しく攻撃して、「溼羅衣」を別名に立てない。一方『歷代詩餘』（卷八）は、「牛希濟詞、有濕羅衣三字、後亦以名調」と記し、『欽定詞譜』（卷四）にも詞牌下註に「見花間集、牛希濟詞、有淚濕羅衣句、名濕羅衣」と見えており、竹溪はこのいずれかに據つて、「溼羅衣」を別名としたのであろう。<sup>15</sup>『欽定詞譜』は、『詞律』と同一の作例三體を載録し、牛希濟「池塘煖碧浸晴暉」詞の平仄式には、半白半黑圈を全く用いずに作例詞そのままの平仄を施

## 註

している。實は「中興樂」の作例はこの三體しか現存しておらず、『詞律』や「詞法小論」が可平可仄を註記するのは誤りとすべきである。同じく三體を録する『詞律大成』（卷三）では、三體いずれにも可平可仄が附されていない。

① ただし『欽定詞譜』は、「前後兩結句、或上四下五、或上六下三、句法俱蟬聯不斷」と述べて、五體すべて前闕第三句と後闕第四句を「句」ではなく「讀」としている。

② 聞汝賢『詞牌彙釋』（著者刊 一九六三）は、「長相思」條に『詞律』からの引用として、「長相思三十六字體又名雙紅豆、山漸青、憶多嬌、吳山青、又二百字一體、或加慢字、另格」と記しているが、保滋堂康熙二六年序刊本にも光緒二年校刊本にもこの記載は見えず、聞汝賢氏が何に據ってこれを引いているのか不明である。

③ 『欽定詞譜』（卷二）は、「長相思」の詞牌名では三十六字體のみ五體載録し、『詞律』が挙げている柳永詞等は、卷三一に「長相思慢」として別に一項を立てている。

④ 近年の張璋・黃畬編『全唐五代詞』（上海古籍出版社 一九八六）は、宋・釋文瑩『玉壺清話』に據り、陶穀作としてこの詞を録している。

⑤ 趙萬里輯『校輯宋金元人詞』（『天機餘錦』 臺聯國風出版社影民國二〇年國立中央研究院歷史語言研究所刊本 一九七二）は「此書卷數及纂輯人姓名均無考、錢大昕補元史藝文志著於錄、蓋元初人所輯、引見花草粹編者凡十六首、知萬曆間尚存」と述べる。

⑥ 『欽定詞譜』（卷三）が、陶穀「好因緣」詞を挙げずに「柳陰陰」詞を録しているのは、「其體始於陶穀、因

陶詞涉俚、故採此詞作譜」と註記しているように、所謂「雅俗の見」に據るものである。

⑦ なお『全宋词』（第五冊 三六八五頁）も、無名氏の作として「柳陰陰」詞を掲げ、「案據勞權考證、撫掌詞乃歐良所編集、但各選本多載作歐良詞、茲在此附著說明、不另出歐良、亦不作互見詞存目」と記している。

⑧ 拙稿「詞法小論小箋（二）」（小樽商科大学「人文研究」第九十二輯所收 一九九六）参照。

⑨ 竹礫が、『詞律』の七體から特にこの二體を引いている點も、『欽定詞譜』が「訴衷情」（卷二）と「訴衷情令」（卷五）の二調に分載したことが、影響を與えたのかもしれない。なお『歷代詩餘』は、「訴衷情」を「訴衷情」「訴衷情令」に分けていない。

⑩ 『全宋词』において「一絲風」の詞牌名を冠しているのは、張輯「臥虹千尺界湖光」詞一首だけである。

⑪ 『歷代詩餘』（卷四）も、和凝の作として「蘋葉軟」詞を録している。

⑫ 和凝四十字體（「紗窗暖」詞）、歐陽炯四十一字體（「天初暖」詞）、歐陽炯四十一字體（「垂繡幕」詞）、晏幾道四十二字體（「花陰月」詞）、葛立方四十八字體（「禁烟却釀春愁」詞）の五體。『詞律』の張元幹四十二字體（「花恨雨」詞）を又體に立てず、晏幾道「花陰月」詞註の中で言及している。

⑬ 註⑧所掲拙稿参照。

⑭ 杜文瀾『詞律校勘記』（卷上）も「按韓詞見花草粹編、前後段第二句、俱作八字、竝非誤多、此註應刪」と言い、また『校刊詞律』も「按魏公此詞、見花草粹編、前後段第二句、均八字、竝非誤多、蓋變體也」と述べ、萬樹を非難している。

⑮ なお『全唐五代詞』（六二二頁、六六六頁）に據れば、清・吳綺程洪編『記紅集』では牛希濟詞を「柳絮飛」と題し、毛文錫詞を「絲雨隔」という詞牌名にしているという。